

異年齢異世代を扱う舞台芸術 のワークショップ

～こども芸術大学『天守物語』を例に～

演出家・元京都造形芸術大学 阪本 洋三

I. 概要

2003年夏に京都造形芸術大学で行われた『親子と学生のためのクリエイティブ・ワークショップ2003・天守物語』は、こども芸術大学企画運営室の最初の長期の試みとして行われた教育プログラムであった。

こども芸術大学は母と子の関係を軸に、人間のつながりを再確認し、人類の共存、地球との共生などを目指す教育の運動であり、その活動の柱に芸術教育と自然教育を据えようというものである。そのような大きなテーマに具体性をもって挑むときに、まず企画の立て方から多角的な検討が望まれた。

今回の舞踊学会での発表においては、特に身体芸術や視覚芸術を総合的に包括する芸術教育がもたらす共同体意識の形成や子どもや母親の社会性の伸長などについて論じてみたい。

さらにはこれを教育と見るのか、またそれならばどのような検証が可能なのかを問いかける試みをしてみたい。

II. 環境

京都造形芸術大学にはファッションや空間演出を扱う空間演出デザイン学科というのがあり、その学科の全面的な協力を得て、衣装制作や舞台装置の制作を含む手作りの舞台創作活動が可能になった。

また、瓜生山から大文字を見ながら毎日練習をするという恵まれた自然環境の中で、夏休みを利用した母親と子どもたちが自分の好きなことを選びながら身体芸術や視覚芸術に接し、最終的には春秋座というプロ使用の歌舞伎劇場を使って発表にまでこぎつけるという体験をした。

III. 方法

1. 扱った芸術作品

泉鏡花原作の『天守物語』は、まさに自然と芸術を扱った新派の作品であるが、その言葉の美しさと現代的テーマにおいて、芸術教育の中に取り上げるのにふさわしいように思われた。

2. ワークショップという手法

いかにして参加者の自主性を重んじるか、とい

うことを徹底して考えることがワークショップの挑戦の部分であった。

III. 記録

ドキュメンタリーとして映像番組を作ったので、その一部をVTR (VHS) でご紹介したい。また、参加者インタビューを通して体験の多角的な検討を報告書にまとめている。

IV. ワークショップの過程

一般公募で、小学生とその親を募集したところ、16組の応募があった。

夏休みの始まる数週間前に募集資料を近郊に配布し、7月末の1週間、8月末の1週間と9月の休日を利用してワークショップを行った。9月最終週に2日間、学内の劇場で公演を行った。

V. ワークショップの成果

参加者は、さまざまな理由でこのワークショップに応募していたが、軽い気持ちで応募された人たちが、非常に自主的に、また積極的に関わることで「与えられる教育」から「学びを自ら切望する、楽しむ教育」への意識的な変化が起こったことが成果としてあげられる。競争がなく、評価をしない芸術教育の在り方が、この成果を引き起こしたのではないと思われる。また、共同体の中で参加者それぞれが個性や特徴を生かし助け合うこと、才能や意欲の違いを認識し合い寛容になること、などの成果は、民主主義社会の構築に、芸術とその教育が大きく貢献できることを示していると言えよう。

参考文献・資料

泉鏡花『夜叉が池・天守物語』岩波文庫

Maxine Greene [Releasing the Imagination](#)

Howard Gardner [Art Education and Human Development](#)

中野民夫『ワークショップ—新しい学びと創造の場』岩波新書

佐藤学・今井康雄編『子ども達の想像力を育む—アート教育の思想と実践』